

総合人文科学研究センター研究部門

「信頼社会」研究

2016 年度シンポジウムの報告

日時：2016 年 12 月 3 日（土）14 時 00 分から 17 時 30 分

会場：戸山キャンパス 33 号館第 10 会議室

このたび開催された「信頼社会」研究の 2016 年度シンポジウムでは、クリストフ・シュリンゲンジーフによるプロジェクトの記録映像『外国人よ、出ていけ！』が上映された。それに先行して、松永美穂先生による挨拶、ウルリケ・クラウトハイム氏（東京ドイツ文化センター文化企画コーディネーター）によるレクチャーがあり、映画上映後は、松永先生、クラウトハイム氏に加えて、岩谷聡徳氏（アーツカウンシル東京調査研究員）の三人をシンポジストとし、さらには参会者全員（約 30 名）を交えてのシンポジウムが開催された。

〈当日のまとめ〉

ドイツの映画監督クリストフ・シュリンゲンジーフが、ウィーン芸術週間の招きで 2000 年の夏に行ったプロジェクトの記録映像である「外国人よ、出ていけ！」を鑑賞し、その後ディスカッションを行った。シュリンゲンジーフのプロジェクトは、2000 年 2 月にオーストリアにおいて極右政党が政権入りしたことを受け、その政党（オーストリア自由党）が掲げる外国人排斥のスローガンを大きく掲げたコンテナに 6 日間難民申請者を住まわせ、インターネットでの投票によって国外追放される者を選び、最後まで残った一人が在留資格を得る、というもので、当時テレビで大人気だった「ビッグブラザー」という番組のパロディーでもある。

この映画について、「アジアではこのようなプロジェクトは不可能ではないか」「いや、すでに日韓中で別の形の試みが行われている」「ヘイトスピーチを逆手にとってユーモアも介在するようなアートは日本では難しい」「日本ではそもそも広場をあのようには使用できない」「シュリンゲンジーフのプロジェクトはツイッターなどが普及する以前の試みで、むしろ 1960 年代の寺山修司などの演劇に通じるものではないか」「プロジェクトに対してウィーンの人々がさまざまな反応を示しているが、深い議論にはなっていないのではないか」などの意見が出され、アートと社会の関わりについて考えるきっかけとなった。

（松永先生記）